

『林良博先生：日本犬のあれこれ』



最初は、国立科学博物館館長の林良博先生からのお話でした。

「今週のことなのですが、国立科学博物館が日本で一番行きたいところの1位になりました。」

例会の前日に開催されていたナイトミュージアムにて、館内各所でミュージシャンが演奏をするというイベントを行った影響もあったようですが、国立科学博物館の入場者数は全国でもトップクラスを保ち続けている日本屈指の博物館です。

「今年は戌年ということもあり、年末から年始にかけて様々な犬種のはく製を特別に展示していました。その中の一つが秋田犬だったのですが、秋田犬と気づく方は少なかったと思います。今でこそ少しずつ姿は統一されてきているとは思いますが、新聞に掲載された60年前の秋田犬を見ても、いろいろなタイプの秋田犬がいたことが分かります。」

なぜ過去に秋田犬は毛色や形など、さまざまな様相を呈するようになっていたのでしょうか。

「秋田犬には闘犬として改良された時期がありました。洋犬の血が入ることで見たくもさまざまになっていたのですが、ようやく、本来の秋田犬の姿を取り戻しつつあります。」

このようなことは犬に限らずほかの家畜にもみられるそうです。

「和牛がいい例です。黒毛和牛は明治以降色々な品種とかけ合わされたことで、姿かたちがどんどん変化していった時代がありました。それを戻すのにずいぶん長い時間がかかりましたが、ようやく元の姿に戻ることができました。」

日本犬の祖先はニホンオオカミではない

「犬がいつ、どこで家畜化されたかという研究はこれまでに数多く行われていますが、現在諸説ある状況です。ユーラシア大陸で家畜化されたことはほぼ確かなのですが、2016年に発表された研究では、ユーラシア大陸の西と東の二か所で同時期に家畜化されたのではないかという見解が述べられています。」

DNA解析による研究が盛んに行われているものの、犬の家畜化の場所と時期についてはさまざまな説が提唱されていて、現在もなお明らかにされていません。

「そのような状況ではありますが、ひとつはっきり分かっているのは、ニホンオオカミは日本犬の祖先ではない、ということ

です。」

人類学者であり解剖学者でもある**長谷部言人博士**は、縄文時代の家犬についての論文を 1925 年に書いています。

「埋葬されている犬とオオカミは形態学では区別が付きません。家畜化された初期の犬では DNA 分析でも分からないことが多いと思います。しかし、現在の日本犬がニホンオオカミから家畜化されていないことは DNA 分析で明らかになるわけです。一方 DNA 解析をしなくても、古い時代の墓を見ればわかります。人と一緒に埋葬されているか否か、という点でもオオカミか犬の区別がつけられます。オオカミを人と一緒に丁寧に埋葬するようなことはほぼありません。」

では日本の犬はどこからやってきたのでしょうか。

「縄文時代の犬、いわゆる縄文犬といわれるものには北海道犬(アイヌ犬)と琉球犬がいます。琉球犬はかなりほかの犬の血が混ざってはいますが、短毛でトラ柄、しっぽが巻いていないといった特徴がみられます。」

そして、犬の起源は人間の動きと連動していると考えられています。

「アジア人が海をわたり日本にやってきて、そこから縄文人が沖縄とアイヌへと移り住んでいきます。両者は遺伝的にかなり近いことも分かっています。それに対して弥生人は、北東アジアから渡来した人と縄文人との血が混ざり、日本本土に定住しました。犬たちは人と一緒に移動して、北海道犬などの縄文犬や柴犬などの弥生犬になったと考えられています。」

そんな犬たちがその昔、どのような暮らしをしていたかは浮世絵に見ることができます。

「浮世絵の時代の日本では、犬は外で猫は家の中でのという飼い方をされていたようです。要するに犬は野良犬的な飼い方をされていたということです。一方、大名たちは唐犬という大型の犬を屋敷内で飼育し、犬引きに散歩をさせて権勢を庶民に見せつけていたという記録があります。」

犬は長い間そのような飼い方をされていたため、どうしても狂犬病という恐ろしい伝染病が生活の中に入ってきてしまうことになります。

「今でこそ日本は狂犬病の清浄国となっていますが、過去には普通に存在していました。日本で狂犬病が収束したのは 1957 年のことです。狂犬病などの病気があちこちで発症することがあれば、人は犬をいくらでも悪者にしてしまうという現状もあります。しかし、少なくとも日本では縄文時代からずっと犬との生活を続けてきています。その頃と今とは生活スタイルは変わっていますが、犬との暮らしが昔からずっと続いているのは日本に限らず世界中でみられることです。」

人と犬が共に暮らしてきた理由には、犬の特徴として、群れ生活をする、雑食性であること、適応力が高いことなどが挙げられます。さらに、長きにわたって生活を共にすることで、人と犬の間には種を超えた特別な絆が作られるようになりました。そして、両者の絆を描いた感動を呼ぶ話が広く世の中に受け入れられるようになっていきました。

「そのひとつがハチ公の話です。人々の感動を呼んだハチ公の話は一躍有名になり、渋谷にハチ公の銅像が作られました。そして数年前には、ここ東大にもハチ公と上野博士の銅像が作られました。」

ちなみに東大のハチ公は、像全体のバランスを考え、実際の大きさよりも少し大きめのサイズで作られているそうです。

「科学博物館にあるハチ公のはく製は、もちろんそのままのサイズなのですが、はく製を見た多くの人が“こんなに大きかったんだ”とっています。渋谷の銅像を見ていると、ハチ公はそれほど大きな犬ではないという印象を持つのかもしれないですね。」

日本で最も有名な忠犬の話はハチ公と言えますが、新潟県ではタマ公の話がとて有名だそうです。ハチ公が話題になった少し後、柴犬のタマ公は1934年と1936年の二度にわたり、飼い主であり狩猟者の刈田吉太郎さんを雪崩で埋もれた中から救い出したそうです。県内には数えきれないほど多くのタマ公の銅像が建立されているほど、忠犬タマ公は新潟のヒーロー犬となっています。

大型犬の将来が危ない！？

「このところにて日本での犬の飼育頭数は年々減ってきています。昨年には猫 953 万頭、犬 892 万頭と、犬と猫の飼育頭数が逆転しました。ですが、この数字を見るに、日本もようやく先進国になってきたなと感じます。アメリカやヨーロッパの多くの国では犬よりも猫の方が多く飼われていますから、いい意味で、日本もそこに追いついたのだと思うのです。大家族から核家族へと変わってきたことも影響しているでしょう。核家族で留守番しがちな状況で犬を飼うというのは、犬にとってはあまりよくないことですから。」

しかし、1歳以下の犬の割合が非常に低くなっているのは問題だといいます。

「将来的に現在の個体数が保てなくなるレベルになってきていると危惧しています。それでも小型犬はなんとかかなと思います。特に危ないのが大型犬です。大型犬の頭数は急激に減少しています。昨今秋田犬が注目されていますが、秋田犬を含め、大型犬の今後をどうにかして守っていければというのが私の願いです。」